

## のぼうの城～人を惹きつける要素

歴史を紐解いてみると、様々な帝王たちが存在した。教科書に名を連ねる帝王たちは、確かに素晴らしい。しかし教科書にはおよそ名は残らないが、民衆の心を掴み、家臣を心底惚れさせ、敵をもうならせる名将達もいる。その名将たちは色々な特徴を持っていて、それぞれの要素から影響を及ぼした。剛腕で支配する者も居れば、知略で魅了する者もいた。今回は、有名ではないが、圧倒的な魅力で人心掌握をした一人の戦国武将の話をしたい。この男、名を成田長親という。当主・氏長の従兄弟。農作業が好きで、領民の作業を手伝いたがるが、不器用なため、どちらかというと迷惑をかけている。背の高い大男で、のそと歩く。当主の従兄弟であるのに、家臣はおろか百姓らからも、その姿から「でくのぼう」を略して「のぼう様」と呼ばれるが、本人は全く気にしていない。運動は滅法苦手で、馬にさえ乗れない。愚鈍な人物と思われているが、実は非常に誇り高く、百姓とも分け隔てなく接する事の出来る度量の広い人物もある。このため百姓・足軽等、身分の低い者たちからは非常に慕われている。百姓達も長親のためならば命を賭けることさえ厭わない。そんな男であつたらしい。つまり剛腕や知略ではなく、人間力で戦国の世を生き抜いた人物である。

『この男の奇策、とんでもないッ。20,000 vs 500。天下の豊臣軍にケンカを売った、でくのぼうがいた』こんなキャッチフレーズで映画化もされた。『のぼうの城』という2012年11月に公開された邦画である。和田竜氏による日本の歴史小説『忍ぶの城』を、映画化したものだ。ご覧になった方もいらっしゃるだろう。大まかなあらすじは、次の通りである。『周囲を湖に囲まれ、浮城とも呼ばれる忍城が舞台である。天下統一目前の豊臣秀吉は、関東最大の勢力北条氏の小田原城を攻略せんとしていた。いわゆる小田原征伐である。豊臣側に抵抗するべく、北条氏政は関東各地の支城の城主に籠城に参加するよう通達した。支城の一つであった城主の氏長は、北条氏に従うように見せかけ、手勢の半数を引き連れて小田原籠城作戦に赴きつつも、裏では豊臣側への降伏を内通していた。一方、豊臣秀吉は、溺愛する石田三成がその人間力の無さから、他の家臣からの信頼が無い事に心を痛めていた。そこで一計を案じ、降伏を内通してきた忍城の攻略をさせるという形で、勝って当然の戦の総大将に任命し、武功を立てさせて他の家臣からの信頼を得ようとする。「三成、忍城を討ち、武功を立てよ」秀吉にそう命じられ、石田三成は大軍勢を率いて忍城に迫る。三成率いる2万超の軍勢に、農民らを含めても3千強の成田勢。総大将たる長親は、将に求められる武勇も知略も持たない、その名の通りでくのぼうのような男。だがこの男にはただ一つ、他人に好かれる才能、特に異常なほどの民からの「人気」があった。地の利と士気の高さから、緒戦は忍城側の圧勝であった。三成は、近くを流れる利根川を利用した水攻めを行うことを決定する。総延長28kmに及ぶ石田堤を建設し、忍城と城下本丸を除いては、水に沈んでしまった。この水攻めに対する長親の策は、城を囲む湖に船を出して、敵兵の前で田楽踊りを披露することであった。三成の指示で、田楽踊りを踊る長親を狙撃するが、長親は一命を取り留める。城に入らず場外で堤作りに雇っていた百姓の中から、長親が撃たれたことと、耕していた水田を台無しにされた怒りから石田堤を壊す者が現れ、ついには水攻めが失敗する。水が引き、三成軍が総攻撃を行おうとする矢先、小田原城が落城したとの知らせが成田勢にも伝わり、忍城も開城する。小田原城落城時までもちこたえた支城は忍城だけだった。』という実話である。この一見、愚鈍にも見えてしまう男が、何故、ここまで多くの人の心を

掌握をしてしまうのか、その在り方に興味が出た。私は成田長親の生き方から大きく2つの要素があるのではないかと考えている。

1つ目は、自分を無防備に吐露できる強さを持っていることである。劇中にこんな場面がある。圧倒的兵力を前に、父は戦うよりも開城降伏を遺言として亡くなるが、長親は2万の兵力を相手に戦をする決心をする。500名の武将と約2,500名の農民の前で父の遺言に反して、戦う事を決めたと伝える。その時にこんな言葉を伝えたと伝記に残っている。「父の遺言に反してワシが戦にしてしもうたあ。みんな、ごめん。父上。。。」と泣き崩れる。それを側近たちは「兵の士気が落ちる」とたしなめるが、民衆や兵たちは、逆に鼓舞され、一致団結していく。これはこのタイミングで、この言葉を伝えたからそうなったのではない。日常生活の中で、長親は身分の上下に関係なく話しかけ、笑顔や心配りをし、信頼関係を構築してきたからこそ、出来た事である。つまり身近な人の心を掌握するのは、一長一短で出来る事は無く、毎日の積み重ねが必要である。また自分の弱さを隠さず、さらけ出している強さを感じる。人は役職や年齢が上がっていくと、見栄やプライドから、自分を大きく見せたり、ついつい何者かになってしまいがちだが、長親は自分の弱ささえ、さらけ出せる度量の大きさ、心の強さを持っている。ここに多くの人は、身分の上下に関係なく惚れてしまうのであると思う。何者かを演じて、本来の自分を隠していては、心から人は惚れてくれないものだ。裏に何か一物有るはずだと疑われることはあったとしても。

2つ目は、群集心理を知り、命掛けで生きる事が出来る気構えがある点である。劇中、水攻めに合い、田畠が水没してしまった農民たちは、手入れを積み重ねてきた田畠を壊されてしまい、豊臣軍に怒りを覚えている。そして日ごろから長親は農民や家臣たちとコミュニケーションを密に取り合っていたので慕われている。幼子がいるから忍城から逃げたいと相談に来た農民の一家を逃がしたのに、豊臣軍はその一家を皆殺しにして忍城に送り返し、皆殺しにするというメッセージを送ってくる。通常、投降した農民は殺さないのが作法であるにも関わらず。そんな状況の中で、自分が「今」出来ることは何かを考え、夜中に船を出し田楽を舞うのである。芸道にだけは通じた自分が田楽を舞えば、敵味方なく魅了する事が出来るかもしれない。劣勢側の総大将の自分が、戦の最中の夜中に、田楽を舞うという奇抜な行動をすることで、少なくとも敵の大将を翻弄させて、出来得るならば敵味方なく惚れさせて、戦況を優位にシフトさせようと考えた。その思惑通り、敵味方を問わず、長親の魅力に引き込まれ、敵も味方も両方の心を揺んでしまう。敵側の軍師は、一瞬で敵味方なく人心掌握してしまう長親を見て、楽勝どころか、泥沼の戦になると予感する。そして豊臣方の総大将石田三成は長親の魅力に嫉妬を覚え、狙撃隊を準備させる。豊臣軍の軍師は忠告をする。「あやつを狙撃してはならぬ。取り返しがつかないことになるぞ！」と。三成は長親への嫉妬心から冷静さを失い、その忠告を無視して、狙撃命令を出してしまった。一方、大いに敵味方を魅了した長親は、船頭に伝えるのである。船をもっと敵軍に近づけろと。つまり狙撃される対象になろうとしているのである。長親は死を覚悟して舞っているのである。自分は死んでもいい。。。自分がもし狙撃されて死んでしまえば、慕ってくれる農民や家臣がまた心を一つにして動き、現状を打破する糸口になる可能性が高いと考え、この奇策を練ったのだ。長親の側近の家臣たちは、長親が死を覚悟で真夜中の田楽を舞っていることを理解し、救済に向かうが、実際に彼は狙撃されて湖に落ちてしまう。狙撃された弾は急所を外れ一命はとりとめたものの、大けがを負う事になった。のぼうと慕っていた味方の総大将が自分たちを守るた

めに命がけで取った行動を見て、長親側が再結束をしていくのである。この状況が、両軍の戦況を一変させてしまう。

このエピソードから鑑みるに、①群集心理の掌握、②率先垂範、③今を生きる、の3つの要素が読み取れると思う。①群集心理に関しては、五徳本能で表現する事が出来る。西方義徳は攻撃本能である。その中で最も強い攻撃本能は旺秋の酉である。酉は鳥瞰図を意味し、全体の状況を把握した上で目の前の事象に対応せよとメッセージしている。つまりどんな勝負であっても、情報収集が大切であり、広角的に得た情報をしっかりと分析し、現状で求められる選択をする必要がある。これは人生の選択であれ、会社経営であれ、まったく同じ事が云える。様々なレイヤーの人々と触れ合い、異業種の人々の価値観を受け入れ、常に情報を得ているからこそ、的確な判断が出来る。また多様性を受け入れていくと、それぞれの立場で、それぞれの人の中に恐れや痛みがあり、楽しさや豊かさがあることが分かってくる。すると何を求められているかが理解できるようになる。一個人の他者の求めていることが理解できると、それを複数に統べると群集心理となることが理解できるようになる。こうやってマーケットや集団を動かしていくのである。その為には日常生活の中で、沢山の人々への心配り気配りがものを云うのである。②率先垂範はオーナーシップと表現してもいいだろう。どんな状況であっても、この環境に私がいるのであれば、私の所有（オーナー）しているものである。平社員であろうが社長であろうが、その組織はその所属している者が作り上げていて、それぞれの立場で最善を尽くし、自分が出来る事を各人が行うから良い状況が作り出せる。誰か任せではなく、自分がコントロールしているという意識である。無責任で自分の人生さえ、自分が所有していない意識で居る人が非常に多い。少し前に話題に上がった「日本死ね」と同じレベルである。賛否両論はあるだろうが、批判する前に自分が出来る事をするという意識を持つ方が人生が豊かに展開していく。無責任者は不平不満や批判が多い。オーナーシップを発揮している者は、如何にしたら出来るのかの可能性を見出している。最後は③今を生きるという概念である。例えば陰陽五行論の中の一極二元論から解説をすると、生と死は表裏一体である。死を意識すればするほど、生が際立つ。死を遠ざけると生が際立たない。死を意識すると生が際立つ。人は生き延びたいと強く思うが、生き延びていくためには今この瞬間、命懸けで生きていく事しかないと、私は考えている。死ぬ氣でやる。頭で理解できても、心が追いついていかないものだ。死ぬ氣でやるから生かされる。生き延びたいと思うから、道が閉ざされてしまう。一極二元論の観点で論じると、ある側面を手に入れたければ、その逆を意識して強化すると手に入る。優しさを探求するからこそ、強くなれる。孤独やド底辺を味わうから、その逆の極みを観る。陰陽の等価交換法則なので、豊かさと苦しさは等価交換する。死ぬ氣で生きないので、ぼんやりとした生が待っている。生きがいを持って生きたければ、この瞬間瞬間を命懸けで生きていくからこそ、際立っていくのである。正に極みの理論である。ある方向に+10を動かせば、その反動で-10に触れる。同様に+10万に動きを付ければ、その反動で-10万に触れる。中途半端な生き方は中途半端な体験を与える。極みを生きる生き方は、極みの体験を与えるのである。何かを極限まで極める生き方をするからこそ、ゆったりと大らかに温かく穏やかに安寧の中で生きる世界が存在するのである。人生はあつという間に終わってしまう。Life is short。光陰矢の如しである。今生かされているこの瞬間を大切に生きていきたいものである。